

【特集】「西園寺公望関係資料」公開と研究状況

コラム 「西園寺公望関係資料」より雨聲会写真と関連史料

眞杉 侑里

二〇一七年一二月、立命館 史資料センターに寄贈された「西園寺公望関係資料」二四一件のなかには、文士らと西園寺公望の交流をうかがわせる史料が複数点含まれている。その中でも今回は、雨聲会会合を写した一葉の写真（史料番号七〇二三二―本稿写真一）と、これに関連する学内史料を紹介する。

雨聲会は、一九〇七（明治四〇）年六月一七日―一九日の三日間にわたり文士を駿河台の西園寺私邸に招いたことに端を発するもので、以降不定期で一九一六（大正五）年まで開催された。本稿に掲載した写真は、一九〇七年一月一八日に駿河台での宴席の返礼として文士らが西園寺を招いた際（第二回）のものである。縦三四・五cm、横四一・一cmの台紙（「T. Shibata AKASAKA MITSUKE TOKIO」のロゴマーク付き）に、縦二一・四cm、横二七・六cmと大ぶりの写真が貼りつけられており、部屋や膳の様子、細かな表情もはっきりと確認できる。

第二回の会場は、芝公園内の紅葉館（二）。写真に写っている文士は、右から柳川春葉、内田魯庵、幸田露伴、横井時雄、西園寺公望、塚原洪柿園、広津柳浪、後藤宙外、川上眉山。中央で背を向けている人物は巖谷小波である（三）。この他にも、島崎藤村、田山花袋、大町桂月、徳田秋声、国木田独歩が参加していた。「雨聲会」



写真一

という名称が決定したのも、この第二回の会合でのことであった。

同回の会合写真は、日本近代文学館にも収蔵されているが、そちらでは文士らが整然と座っており、楚々とした雰囲気がある。それに対して、今回、立命館 史資料センターに寄贈された雨聲会の写真は、文士らの中に同館の女中らが座り^(三)、銘々が酒や雑談に興じる様子が写されている。ある者は足を崩して談笑し、ある者は酒をあり、ある者はカメラに背を向け熱心に話し込む。いかにも酒席然とした様子をうかがわせる。

なお、同じく二〇一七年に寄贈された史料群の中には、一九一六(大正五)年の第五回会合の折に作成された寄書(史料番号七〇二三八)も含まれている。こちらには、森鷗外、大町桂月、小杉天外、田山花袋、泉鏡花、塚原洪柿園、永井荷風、内田魯庵、竹越與三郎、柳川春葉、斎藤実、横井時雄、巖谷小波、西園寺が揮毫した^(四)。

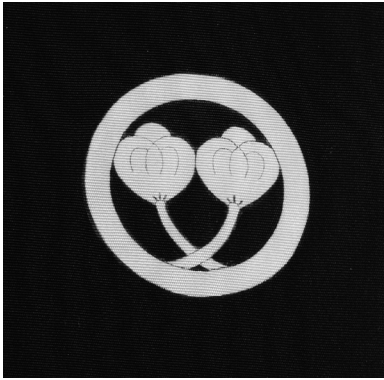
また、この雨聲会に参加した人物に係する品が、他にも立命館大学に所蔵されている(写真一を参照)^(五)。この紋付羽織の裏布には、「翰筆有真香」の文字とともに「陶庵」と西園寺の号が確認できる。羽織とともに保管されている木蓋によ



写真二

れば、これは柳川春葉旧蔵の品であるという。柳川春葉（一八七七（明治一〇）年—一九一八（大正七）年）は明治・大正期の小説家で、尾崎紅葉の門下としても有名な人物であり、先述の通り雨聲会の参加者でもあった。西園寺が羽織に揮毫した細かな経緯についてはよく分らないが、羽織の紋（写真三—おそろく茶の実紋カ）は第二回雨聲会会合の際の柳川（写真四—右の背を向けた人物が柳川）の纏うものと共通しており、これを裏付ける。

いずれも、政治家・最後の元老としての側面が多く取り上げられる西園寺公望の文人としての側面をうかがわせる貴重な史料である。



写真三



写真四

注

- (一) 紅葉館の座敷の様子は、『東京風景』（小川一真出版部、一九一一年、三六頁「紅葉館の踊」）に掲載されている。写した角度は異なるが、紅葉をあしらった襖の天袋・地袋は立命館史資料センター所蔵の写真と同様のものと推察される。
- (二) この写真は、一九二八年八月二日に『東京朝日新聞』に掲載された「其の頃を語る【三十四】」（二面）に掲載されている。同記事は、巖谷小波が雨聲会について回想を寄せたものである。
- (三) 「文士の首相招待会」（『東京朝日新聞』一九〇七年一〇月一九日）六面。
- (四) なお、写真と同じ第二回の寄書については、徳田秋聲記念館に所蔵されている。
- (五) 平井嘉一郎記念図書館貴重書庫にて保管。

